

あとがき

定年を目前にして、書籍類の整理をしている。学生時代に読んだ本の詰まつた箱を開けると、古びた懐かしい本が出てくる。本を開くと、自分が40数年も前のあの時期に、何にどのように興味を持っていたのかが分かる。

デカルトの『方法序説』が出てきた。岩波文庫だが、表紙の裏に青インクで自分で書いたメモがあった。

デカルト 4 規則 (p. 29)

1. 私において明証的に真であると認めることなしには、いかなることをも真であるとして受けとらぬこと。
2. 対象を求められるかぎり細かな、小部分に分割すること。
3. 私の思索を順序に従ってみちびくこと。 単純→複雑への認識。
互いに何の順序もない対象のあいだに順序を仮定しながら。
4. どの部分をも完全に枚挙。再検査。

この内容は第二部にあることだが、要約してメモしている。この部分の前後には自分で傍線を引いた箇所がいくつもある。特に2ページ前の「かかる真理は全民衆によってよりは、ただひとりの人間によって発見されるというのがはるかに真実に近いらしいから。」という部分には波線を引いている。「私はやむをえず自分を自分自身で尊こうと企てなければならなかつた。」がそのあと1行あけて続いている。

研究は、特に新しい考え方を発展させようという段階では、民主主義・多

あとがき

数決はなじまない。誰かに相談しても研究の必要性や成果に対する確信が得られるわけではない。否定的な達観を示されて、逆に意気込みをくじかれたりすることもある。一人の、ただ一人の先駆者が自分の発想の有効性と研究の必要性を信じてひたすらに進むしかない。

当時得ていた日本語構造伝達文法の萌芽的発想は、日本人のより適切な言語認識のためにどうしても発展させねばならないものであると私は信じていた。この研究は絶対に必要であるとの確信はあったが成功するかどうか分からぬ不安の中にいた。先駆者の孤独を身にしみて感じていたのだと思う。

日本では、文系の新しい発想・仮説による研究はほとんど認められない。永田(1994:128)に教えられたことは、研究費を申請するとき、自分のやっている研究は、アメリカではその研究が世界一であること、フランスでは世界中で自分一人しかやっていないこと、つまり独創性のあることを強調する必要があるけれども、日本では逆で、独創性のないこと、みんながやっている研究であるということを書かねばならない、ということであった。

日本では独創性に積極的な価値はなく、独創的研究は研究そのものが存在しないものとされたり、否定的な評価を受けたりする。いかにその研究が事象を的確に捉えて適切に説明していても、ほかの誰も、特に内外の権威者のやっていない研究は日本ではまず認められない。日本では創造者であることよりも権威者の正統な継承者であることのほうがずっと価値があり、評価が高い。創造者は異端的存在であるから、磔刑に処したほうがよいのである。

その創造者が認められることがあるにしても、その考えの必要性と内容が本当に理解されるまでには死んでから10年も、20年も30年も40年もかかる。

と、私はこのように妻に言っていた。

人間は学校で教えられて、昔から慣れ親しんできた思考を変えたがらないし、特に日本は権威主義が強いから、非権威者の新しい説など（院生以外は）誰も聞かない。

結婚前にピアノの先生をしていた妻は夫の言に対して半信半疑であった。

2011年1月に突然「マーキーズ・フーズラー」^{*1}から手紙が来た。私の研究業績を評価して、私の経歴を2012年版の人名年鑑（“Marquis Who's Who in the World”）に載せるから経歴書を送れというのである。

何のことかと、とりあえずインターネットの「ウィキペディア」(Wikipedia)で調べてみた。すると、アメリカで発行されている、世界で最も権威ある年鑑版紳士録であって、国家元首、財界実力者、ノーベル賞受賞者、オリンピックメダリスト等の著名人、また、無名であっても極めて独創性が高い芸術的・学術的創作活動を行った人物が掲載されている、と書いてある。

マーキーズ・フーズラーのホームページ(<http://www.marquiswhoswho.com/>)の人名検索（People Search）サイトでは、過去・現在の掲載者氏名が見られるようになっているので、検索してみた。すると、日本語文法関係で掲載されるのは私が初めてのようであった。

「さすがアメリカ！」と驚嘆した。こんなに早く、生きているうちに認めてくれたのである。創造的な理論をこぞって無視する日本ではとても考えられない。このような評価のされ方があるとは夢にも思わなかったが、私の経歴はその年鑑版紳士録の2012年版に載り、引き続き2013年版にも載り、2014年版にも載った。

それだけではない。「21世紀の偉大な精神」^{*2}の1人としても選ばれた。
 「21世紀の卓越した知性2000人」^{*3}の1人としても選ばれた。
 私の研究情報発信ホームページに載せた大学院の教材等も評価されて、
 「トップ100人の教育者」^{*4}の1人としても選ばれた。

*1 Marquis Who's Who

*2 “Great Minds of the 21st Century (6th edition, 2013)”, American Biographical Institute, Inc.USA

*3 “2000 Outstanding Intellectuals of the 21st Century -2012-”, International Biographical Centre, Cambridge, England

*4 “The IBC Top 100 Educators 2012”, International Biographical Centre, Cambridge, England

あとがき

日本語文法、というより、日本語という言語そのものを、言語として根本から問い合わせようと企て、その企ての重要性を強く認識し、ひたすらに研究し、創造的な形で結果を出した。これが評価されたのだと思う。

研究を続けてきて本当に良かったと思う。人に認められることよりは、母語・日本語のしくみが本当に理解できるようになること、つまり自分の本当に納得のいく形で理論を創り上げること、これを第1の目的として研究してきたが、それがこのような思いもかけない形で評価されたのである。

おかげで妻もやっと夫の研究の重要性に少し気がついてくれたようである。

始めたときはどうなるか先の見えない研究であったが、こうして40数年が経過して（ただし、海外での日本語教師という10年間の中止があったので、研究は実質30年あまり），基本的な部分は一応完了したように思える。母語・日本語のしくみが、私の思考法に合わせる形で本当に理解できるようになった。救われた思いである。職務上の定年を迎える折にこのような状況に置かれたことは本当に幸せなことに思う。今後は時間的にも精神的にも研究に専念できる状況になるので、これまでの成果の主要部を一冊のバイブルのような形にまとめてみたい。いくつかの根本的な事柄にも取り組んでみたい。

日本の中学生・高校生・大学生にも日本語の言語としての科学的なおもしろさを伝えたい。そんな思いも強くなってきた。

在職中にお世話になった多くの方々と、教室で私を研究へと奮い立たせてくれた学生の皆さんに対して、感謝の気持ちでいっぱいである。日本語研究学界で理解を示してくださる研究者の方々にも感謝申しあげる。

また、この書の出版のために杏林大学大学院国際協力研究科より出版助成を賜ったことにも感謝申しあげる。

感謝のうちにこの書をしめくくることができることをこの上ない喜びに思う。

2014年1月 今泉 喜一